2026年10月11日（日）主日朝礼拝説教

『狭い戸口から入れ』　井上隆晶牧師
使徒言行録20章18～24節、ルカによる福音書13章22～30節

❶【狭い戸口から入る】

イエス様は村や町を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられました。するとある人が「**主よ、救われる者は少ないのでしょうか**」（ルカ 13 章 23 節）と尋ねてきました。イエス様はそれに対して、「**狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。**」（同13章24節）と答えられました。「**エルサレムへ向かって進む**」とは、十字架の死に向かって進むということです。**十字架に向かうとは苦しむこと、恥をかくこと、負けること、損をすること、自分を捨てること、願望を手放すことです。一方弟子たちや群衆は、まさか自分たちが死に向かっているとは思ってもいません。エルサレムには楽しみが、栄光が、勝利が、得することが、手に入れることが、願いがかなうことが待っていると思っています。このイエス様の歩みと、弟子や群衆たちの歩みは真逆であり、天と地の隔たりがあります。**

「**狭い戸口から入る**」とはどういう意味でしょう。マタイ福音書では「**狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。**」（マタイ 7 章 13～14 節）と書かれています。狭い戸口も狭い門も同じ意味でしょう。その狭い門とは、天国へ入る門のことです。私はこれを読むと思い出すことがあります。

●奈良の東大寺の大仏殿の中に、穴の開いた柱があるのをご存じですか？ちょうど大仏の後ろにある柱です。その穴をくぐることができると、病気や災いから守られるという言い伝えから、大人も子供もその穴をくぐるために行列を作って並びます。子供は簡単にくぐれますが、大人はなかなかくぐれません。荷物を降ろし、地面にはいつくばって、手を伸ばして反対側からひっぱってもらってやっとくぐりぬけることが出来るのです。

狭い門を通るには、身を低くし屈まなければなりません。それは自分の罪を認める謙虚な姿勢を意味しています。また細い道は一人しか通れません。仲間と一緒に歩こうとしても歩けないのです。人は一人で神の前に立つのです。あなたは神に従ったかどうかが問われるのです。不幸を周りの人のせいにして仲間と一緒に他人の悪口を言っている内に、人生は終わります。あなたは自分の罪を見つめ、神に祈らなければなりません。神と一対一で語り合い、祈る人は細い道を歩く人です。それは修道者の生き方です。それはまた孤独な道です。**他人がしているから自分もするのではなく、誰もしなくてもキリストが「せよ！」と言われたら行**

うのです。皆がしていても、キリストが「するな！」と言われたらしないのです。横を見るのではなく、上なる天を見上げて、キリストに似ようとする生き方です。その覚悟が必要です。

●皆さんはクッキーを作る時の、型抜きを知っているでしょう。星なら星の型、ハートならハートの型、動物なら動物の型で生地をくり抜きます。

それと同じように、**この天国の門はキリストの形をしているので、それに合わせなければ天国に入ることはできないのです。「狭い戸口」**とは実に、キリストのことなのです。**だから自分にキリストを合わせるのではなく、キリストの生き方に自分を合わせなければなりません。**

❷【お前たちがどこの者か知らない】

天国の門は誰にでも開いていますが、やがてその扉が閉じられる時が来ます。その扉が閉じられたら、外に立って戸を叩き「ご主人様、開けて下さい。一緒に食べたり飲んだりしましたし、教えも受けたのです」と言っても「**お前たちがどこの者か知らない**」（ルカ 13 章 27 節）と言われて天国に入れてもらえないのです。この天国に入れない人とは、イエス様を「ご主人様」と呼び、共に食事をし、その教えも聞いていますから、キリスト信者であることが分かります。それなのになぜ天国に入れてもらえなかったのでしょう。これと同じ言葉を言われた人たちがいます。ある人たちは「**主よ、主よ、私たちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか。**」（マタイ 7：22）と言いましたが、キリストは「**あなたたちのことは全然知らない。**」（マタイ 7：23）と言われました。また油を用意していなかった五人の愚かなおとめも「**わたしはお前たちを知らない**」（マタイ 25：12）と言われてしまいました。彼らの特徴は何でしょう。**それはいくらイエス様の名前を用いて偉大な業や奇跡を行ったとしても、神の御心を聞かず、自分勝手に行なったということなのです。言い換えれば彼らはキリストを主人とせず、自分を主人としたのです。キリストを利用したと言ってもいいでしょう。**熱心であるかどうかは関係ありません。人は自分が欲しいものを手に入れるためには熱心になるものだからです。熱心だから正しいとは言えないのです。

地上でも天上でも生き方は同じなのです。地上で自分勝手に信仰する人は、天上でも自分勝手に信仰するでしょう。地上でキリストに従わない人は、天上でも従わないでしょう。地上でキリストをそんなに必要としなかった人は、天上でも必要としないでしょう。人の生き方はそんなに変えられないからです。

❸【上昇ではなく下降の道を選びなさい】

他の箇所で、イエス様は弟子たちにこう言われました。「**あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。**」（マタイ 20 章 27 節）弟子たちはこの世の人が皆求めること、強く、大き

く、豊かに、偉くなることを求めていました。しかしここで主イエスはこれとは全く逆の生き方をするように命じられるのです。「**偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。**」それは弱く、小さく、貧しく、低くなる生き方であり、キリストが歩まれた生き方です。ヘンリ・ナーウエンはこう書いています。

●「キリスト教指導者たちがイエスの御名を語りながら、権力の誘惑、すなわち政治的、軍事的、経済的、あるいは道徳的、霊的能力という力の誘惑に、絶えず負けて来たということです。…神の民が、ときに愛よりは権力を、十字架よりは支配を、導かれる者よりは導く者になろうとする誘惑にさらされた歴史だといえます。本当の聖人とは、最後までこの誘惑に抵抗し、それによって私たちに希望を与えることのできる人です。…**クリスチャンの指導者のたどる道は、この世が多大な精力を費やして求める上昇の道ではなく、十字架にたどりつく下降の道です。**」

私たちも昔の弟子たちと同じように考えているのではないのでしょうか。教会がもっと大きく、豊かで、強くなり、この世を支配し、権力を獲得することが祝福だと。しかし詩編にはこう書かれています。「**主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。大き過ぎることを、わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません。わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を幼子のように、母の胸にいる幼子のようにします。**」（詩編 132：1～2）また箴言にも「**貧しくもせず、金持ちにもせず、わたしのために定められたパンでわたしを養ってください。飽き足りれば、裏切り、主など何者かと言うおそれがあります。貧しければ盗みを働き、わたしの神の御名を汚しかねません。**」（箴言 30：8～9）人間には与えられた「分」というものがあります。その分を守るように教えます。**その分（境界）を超えることを罪というのです。この世においては、何事もほどほど、八分目がちょうど良いようです。**

私はこの教会に来て 36 年が経ちました。この教会がなぜもっと大きく豊かにならないのかと思います。信徒の数が増えて来ると散るのです。だからトコロテン教会と呼んでいます。それも有力な信徒の方がいなくなるのです。どうも神様が大きくなることを止めておられるとしか思えないのです。教会というのは小さく、貧しく、弱く、迫害されている時の方が信仰は生き生きしており、神の業が現れます。教会が大きく、豊かに、強くなると人間の計算や人間の業ばかりになり、信仰の質は低下し、堕落するのです。**十字架への細い道を選ばなければなりません。それは上昇の道ではなく下降の道です。楽になるのではなく苦しむ道であり、栄光ではなく恥の道、勝つのではなく負ける道、得をするのではなく損をし、相手を生かして自分を殺す道、願望がかなうのではなくそれを手放す道です。神が許可されるならこの世で大きく豊かになりましょう。そうでなければ、この道を決して忘れることなく歩みたいと思います。**